実践団体情報

記入日	2020 年 1 月 17 日（2019 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	京都府立鴨沂高等学校
代表者名	藤井　直
プラン全体のタイトル	一事が万事 ～ゴミ拾い人は助け人～
電話番号	075-231-1512
メールアドレス	ohki-hs@kyoto-be.ne.jp
実践団体の説明	探究的な活動を重視する機運を受け、できる限り早くから開始する必要のある防災教育を、新入生の学習の軸とした。 毎月 3 時間ある総合的な探究の時間では上半期を確保し、また本校の探究学習におけるパイロット事業として毎週 3 時間ある化学基礎の内 1 時間を確保し、それらの時間を主として防災教育を行ってきた。
所属メンバー	顧問　野村　康隆・岡田　暁雄 統括　星原　庸平 ファシリテーター　今井　駿 サポーター　小畑　響子・中野　節子 総務　中川　雅博・中路　航
活動地域	京都市上京区（主に荒神口） 京都御所近辺 鴨川周辺
活動開始時期・結成時期	2019 年
過去の活動履歴・受賞歴	特記事項無し

プラン全体の概要	「防災教育を通して生徒の力を引き出し育むこと」が本プランの目的である。「課題を発見・解決する力や協働する力、人のために力を発揮する姿勢等の全てを生徒は持っている」という信念を実践メンバー内で共有し、生徒が自らそれらの力を発揮する機会を提供することを繰り返してきた。 模範解答の提供を手放し、生徒が主体的に活動して考えるプロセスを尊重して、一人でも多くの生徒にとって防災が自分事になることを目指した。 また、老若男女に対して自分たちが重要性や必要性を感じた防災について発信する機会を設け、地域の防災意識向上のきっかけを本校が創り出すと同時に、生徒のパーソナリティの形成を意図した。 週１時間を確保したことで、リアルタイムの情報や旬な話題を用いた防災教育が通年で可能となり、より一層教育内容と生活がリンクしやすかったことが本プランの強みである。

プランの年間活動記録

	プランの立案と調整	活動準備	実践活動
４月	探究活動		
５月	防災交流会・探究活動		
６月	探究活動		
７月	防災交流会・探究活動	防災交流会	
８月	防災交流会・探究活動	防災交流会	
９月	防災交流会・探究活動	防災交流会・探究活動	防災交流会
10 月	探究活動	小高連携・探究活動	小高連携
11 月	探究活動	探究活動	探究活動
12 月	探究活動	探究活動	探究活動
１月	探究活動	探究活動	探究活動
２月	探究活動	探究活動	探究活動
３月	探究活動	探究活動	探究活動

プラン全体の反省点・課題・感想	「防災」と「探究」という共通言語により、生徒及び教員間でアクティブラーニングが浸透したが、防災をその他と同じ一教材という観点で捉えていては、教科横断的に防災教育を進めることが困難であった。 カリキュラムとして防災教育を位置づけ、学校全体として方向性を決めていく必要がある。
今後の活動予定	危険箇所及びリスクの発見と対策の提案を、管理者へ発信し対話を通して実践へと繋げる。また、科学的な知見や歴史的な事実を反映してより客観性のあるオリジナルクロスロードを作製し、本校を中心とした「近隣地域版」として整える。そして地元密着型のオリジナルクロスロードの作製手順を体系的にまとめる、汎用性を持って全国的に共有することができるフレームワークを作成したい。

実践したプランの内容と成果

記入日	2019 年 1 月 17 日（2019 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	京都府立鴨沂高等学校
実践番号	1
タイトル	鴨沂発！「もしも」に備える防災交流会
実践担当者のお名前	中川　雅博・星原　庸平・今井　駿

実践にかかった金額	3 万円未満
実践の準備にかかった時間	数週間
実践活動を実施した日時	2019 年 9 月 14 日 9 時 30 分～10 時 50 分
実践の所要時間	１時間 20 分
実践の運営側で動いた人の人数	20 人
防災教育の対象者の属性	小学生（高学年）・中学生・高校生・教職員/保育士等・保護者/PTA・地域住民・社会人/一般・女性・高齢者・防災関係者
防災教育の対象者の人数	約 350 人
実践を行った都道府県と市区町村	京都府京都市
実践を行った具体的な場所	鴨沂高校講堂・普通教室
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	自衛隊員・消防隊員・ファシリテーターが得意な教員 オリジナルクロスロード

達成目標	災害時に共に避難する可能性がある近隣の人々と出会い、コミュニケーションをとることが大きな目標であった。また、１年生が全体のファシリテーターとして主体的にアクティブな場を創り出すことも目指した。	
どの力を身につけようとしましたか？	知識・技能	少し
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	大いに

実践内容・方法	最も重要なことは、「人は全てを備えた存在である」という信念に基づき、「力を引き出す場を創る」・「力を引き出すコミュニケーションをとる」ことに対して教員間で合意を形成することである。 【準備段階】 ・学校周辺で危険箇所発見やリスク想定を行うフィールドワークの実施 ・具体的な場所名を用いてオリジナルクロスロードを作製 ・生徒同士でオリジナルクロスロードの実施 ・オリジナルクロスロードの表現のブラッシュアップ ・ジレンマの起きやすさや想定の具体性により、各クラスで優秀作品を選定→交流会で使用 ・各クラス８名（グループワーク時のリーダー）が、交流会当日にファシリテーターとして力を発揮するために、特別講座を４回開催し、①マインドセット・②アイスウォーミング・③ゲーム進行の３点について実習を交えた研修を行った。 【実践当日】 ・１教室あたり５名×８グループでオリジナルクロスロードを実施 ・各グループにファシリテーターの生徒は１名ずつ ・各教室にグループに入らないファシリテーターが４名ずつ ・各教室に教員は２名ずついるが原則何も発言はしない
得られた成果	生徒が自作した教材を用いたことで、現在の高校生が有する ICT 活用力やコミュニケーション力、防災意識等を参加した近隣住民やPTA、近隣小中学校関係者の皆様に直接感じて知っていただくことができた。このことは、生徒への信頼構築の機会となったことはもちろん、地域・家庭・小中学校段階において、より良い人”財”育成をしていくための課題を発見する機会にもなった。当日の感想からは、生徒に対して「頼もしい」・「立派に成長している」という意見のみならず、「３学年全てで実施して欲しい」・「学外でも連携して防災教育を行う必要性を感じた」・「もっとコミュニケーションをとってほしい」等、より以上を目指す意見もいただいた。このことから、社会総がかりで教育を行っていくために必要な『生徒への眼差し』を獲得できたと感じている。

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">　また、ファシリテーターを努めた生徒の多くが、達成感や満足感、自己肯定感を抱いた。さらに、「機会があればまたやりたい」・「今度はもっとこうしたい」というさらなる自分の成長を信じてチャレンジする意欲を感じる意見も得られた。
　さらに、生徒が充分にファシリテーターを努めることに半信半疑だった教員に対して、生徒の力を証明する機会となり、生徒の力を育む環境創りの一助となった。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">どのくらい身につきましたか？</td><td>知識・技能</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>課題・苦労・工夫</td><td colspan="2">【課題】
①世話を焼きすぎる教員との対話
②コミュニケーションが苦手な生徒への個別対応
③教員間の力量差（アクティブラーニングの経験量）

【工夫】（課題と番号はリンク）
①生徒の課題解決能力を信じて見守るという教育観を、該当教員との対話により共有する。
②可能な限り個別で対話をして、信頼関係を構築したり、できることとできないことの把握を行ったりする。
③教員間の対話及び教員研修を行うことで、視点を共有して育みたい力を整理する。</td></tr>
</table>

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	自衛隊　京都地方協力本部
関係者の説明	各種アドバイス・講演・応急救護実習
関係者の連絡先	075-221-3266
関係者の名前・団体名	上京消防署
関係者の説明	各種アドバイス・交流会講評
関係者の連絡先	075-431-1371
関係者の名前・団体名	京都市立正親小学校
関係者の説明	チャレンジプラン実践校　交流会参加校の１つ
関係者の連絡先	075-451-0091

★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	学外の機関や他校との連携を考えている学校
伝えたい内容	お互いのニーズが重なり合う部分を探してぜひ実践してください。

記入日	2019 年 1 月 17 日（2019 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	京都府立鴨沂高等学校
実践番号	2
タイトル	小高連携で考える「もしもの瞬間」
実践担当者のお名前	星原　庸平・今井　駿

実践にかかった金額	ほぼ 0 円
実践の準備にかかった時間	1 日
実践活動を実施した日時	2019 年 10 月 18 日 14 時 50 分～15 時 40 分
実践の所要時間	50 分
実践の運営側で動いた人の人数	４人
防災教育の対象者の属性	小学生（高学年）
防災教育の対象者の人数	約 40 人
実践を行った都道府県と市区町村	京都府京都市
実践を行った具体的な場所	京都市立正親小学校教室
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	ファシリテーターが得意な教師 クロスロード

達成目標	自分事として捉え、主体的に議論する。 小学生がアクティブに活動する場を高校生が創り出す。	
どの力を身につけようとしましたか？	知識・技能	少し
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに

実践内容・方法	先述したプラン「鴨沂発！「もしも」に備える防災交流会」（以降「前プラン」）に参加した京都市立正親小学校から出張授業の打診をいただいた。交流会に参加した児童が友人に話をし、それに興味を持った児童達の声から今回の小高連携が決定したため、あらゆる縁の大切さを改めて実感したと同時に、防災交流会参加者が学んだ内容を自分の所属団体へ持ち帰り、そこで還元しているという理想的な循環が起きていることから、前プランの実施意義を確認することができた。 本校からは有志の生徒 10 人が参加した。前プランでクラス全体のファシリテーターをした生徒が、アイスウォーミングとゲーム説明を行い、ゲーム中はそれぞれの生徒が各グループで補足をし、児童の話を傾聴しながら、議論を繰り返した。	
得られた成果	児童と生徒はお互いの考えの深さに感心し合い、対話を楽しみ、自分とは異なる視点の意見を主体的に学んだ。 同級生の中では発言の少ない生徒が、異年齢集団の中でファシリテーターとして力を発揮したり、普段の授業では気がつかなかったが、高い傾聴力を持った生徒を発見したり、小学生と過ごす場が高校生の力を引き出していた。	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	小学生の発言量や思考力を事前に把握していれば、より柔軟な展開が可能であった。連携事業を行う際は、予め普段の様子を観察することで、連携先の力を最大限に引き出すことができると改めて感じた。	

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	京都市立正親小学校
関係者の説明	チャレンジプラン実践校
関係者の連絡先	075-451-0091

★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	正親小学校　児童
伝えたい内容	自ら考えて伝える姿勢をこれからも大切にしてください。

記入日	2019 年 1 月 17 日（2019 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	京都府立鴨沂高等学校
実践番号	3
タイトル	一事が万事 ～ゴミ拾い人は助け人～
実践担当者のお名前	岡田　暁雄・中川　雅博・星原　庸平 今井　駿・小畑　響子・中路　航

実践にかかった金額	ほぼ 0 円
実践の準備にかかった時間	数ヶ月
実践活動を実施した日時	2019 年 4 月 12 日～2020 年 3 月 19 日
実践の所要時間	約 42 時間
実践の運営側で動いた人の人数	中心：２＋実働：１０＝１２人
防災教育の対象者の属性	高校生
防災教育の対象者の人数	（第 1 学年）240 人
実践を行った都道府県と市区町村	京都府京都市
実践を行った具体的な場所	鴨沂高校教室・化学実験室・物理実験室
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	ファシリテーターが得意な教師・生徒の様子を見守り適当な支援ができる教師チーム・ICT 機器（スマホ or タブレット）

達成目標	【目的】 得たい成果を得るために自ら行動を選択して生きる人財の育成 【目標】 ・他者との対話的な協働を通し、自らを省察する。 ・課題発見力を養い、自分事として諸課題に挑む。 ・探究活動の一般的なステップを学び、実践する。	
どの力を身につけようとしましたか？	知識・技能	少し
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに

実践内容・方法	・グループワークの身体化 　グループで課題解決を行い、成果を振り返った。 ・視点の変換 　シックス・ハット法を用いて新聞記事について議論を行った。 ・クロスロードの実施 ・マインドマップの作成 　「防災」をセントラル・イメージとして思考を可視化した。 ・フィールドワークの準備 ・フィールドワーク 　学校周辺の危険箇所やリスクを探索した。事前準備は、地図のみで探索ポイントの整理を行った。 ・オリジナルクロスロードの作製 　フィールドワークの内容を活かし、本校周辺を対象としたオリジナルクロスロードを作製した。 ・オリジナルクロスロードの交流 ・ダイレクトロード（内陸の町）の実施 ・防災交流会（前述プラン）のためのファシリテーター養成 ・上半期の振り返り ・質問作りのワーク 　自分の感性を大切にして些細な疑問も表現する活動を行った。 ・フェルミ推定 ・マルチプルインテリジェンステストによる自己の客観視 ・パネルディスカッション 　情報収集の一例として、「探究」を話題として、教員がパネルディスカッションを行った。生徒は、パネラーの特徴・観点の観察や質問づくりを行った。 ・パネルディスカッションの質疑応答と探究テーマの決定 　生徒から受けた質問を抜粋してパネラーが解答した。クラス全体で生まれた質問の中から、各グループで深く掘り下げたいものを選び、それを探究のテーマとした。 ・対話による探究活動 　生徒間の対話を中心に進めながら、数分間ずつ教師との対話時間を

	設け、より深い議論が行われるよう促した。 ・ワールドカフェ型の発表会準備 ・発表会 　共通のルーブリックを用いて、自己評価と各発表の評価を行った。 ・発表会のリフレクション 　「プロセスに注目すること」と、友人からの評価を例に「客観的な視点を持つこと」を重視した。 ・探究活動の基本ステップの学習 ・基本ステップに沿った探究活動の実践 ・１年間の振り返り
得られた成果	本校 AET より、他学年や他校と比較すると、協働に対して非常に積極的であり、表現の準備から実践までがスムーズであることに加え、表現力が豊かであると評価を受けた。 　教科担当教員からは、他学年と比べ「まずやってみる」というチャレンジの姿勢を持つ生徒が多いと評価を受けた。 　生徒の自己評価からは、活動内容を身近に感じ、実生活との繋がりをたいへん感じていることが明らかであった。また、学力の三要素及び自己省察力が身についたと感じる生徒は、いずれも７割以上いた。 　さらに、パネルディスカッションではパネラーが多岐にわたり話題を展開したため、学年全体で 93 グループがそれぞれの興味に合わせて探究テーマを選んだが、２割を越える 20 グループが防災に関わるテーマを選択した。こちらからテーマを与えて防災について考えることも大切であるが、このように自分たちの興味として防災に目が向いたことは、１年間本プランを行ってきた成果であると感じている。 　探究した内容については、「どのように実感を伴って防災意識を育めるのか」、「真に有意義な避難訓練はどのようなものか」等、今後の展開が大きな成果を生み出すヒントになるようなものがあった。 　あるグループが探究の中で導いた１つの納得解がたいへん興味深かった。「目の前にゴミが落ちている。捨てようと思ったときに、すぐ行動できる人と、すぐには行動できない人、行動しない人がいる。」という前提があり、「思ったときにすぐ行動することは、災害時のように咄

	嗟の判断が求められる際にも活かされる。」と結論づけた。事実か否かの根拠は全く無いが、日々の積み重ねが大きな成果を生むという点で非常にわかりやすい例であると感じ、現在は本プランの名称（「一事が万事～ゴミ拾い人は助け人～」）に反映している。	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	１年間を通じて、生徒の様子や発達の段階、当日の状況によってコミュニケーション方法が変化するのは当然であるが、特に本プランでは、見守り続けて最適なタイミングで適当な質問を行うことや、適当な教授を行う等、我々教師の力量が試される場面が多々あった。やりがいを感じる一方で、大人同士で governance がとられていなければ場創りに不具合が生じる可能性も高い。そのため、学校全体としての方向性や教育観の consensus が重要である。組織の長がプランを把握し、ある程度の initiative を取ることの重要性は自明である。	

★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	本校生徒
伝えたい内容	これからも、違いを楽しみ違いから学ぶ人であってください。